

に、賣つくすたいたう餅やまんぢうの聲ほのかなる夕月夜哉と、饅頭二度出たり、おもふに調菜のかたは、むねと菜饅頭を作る料理果子にて、常の饅頭とは異なるべし、食物本草、餛飩の製やうをいひたるをみるに、菜饅頭のやうなり、東鑑に十字とあるものは饅頭なり、晋書、何曾、性奢豪、務在華侈、云々、蒸餅上不拆作十字不食、これを奢れる故事にいへり、こゝには榮耀に餅の皮をむくともいへり、今おぼるまんぢうといふは、上の皮をむきたるなり、是等は物の數ならず、えもいはれぬ美食、費を顧みざるもの枚擧しがたし、是を何とかいはむ、十字は蒸て拆たるをいふ、職人盡の繪に饅頭の頭に朱點あり、是もと點にはあらじ、十字なるべし、高野山の或院に宿りしが、饅頭を出せり、是も其遺風か、萩原隨筆に、智恩院の御忌法事に、衆僧へ引饅頭、面に紅粉を點する、これ十字引の遺風なりと云と有り、拆たる状を畫るもいとおかしきわざなり、昔し饅頭は賞翫したる物なり、貞順條々聞書に、折の内にていち上りたるは、まんぢうの折にて候と有にても知るべし、堀河百首題狂歌、松まんぢうのかざりにさせる枝みれば遠きあこやの松は物かは、あこやは、今いふしん、こゝのこゝは、今いふしん古畫に饅頭屋の體をかきたるに、手桶に草木の枝をさして、看板のやうにあるは、かいしきに用る故なり、食物は何によらず、むかしはみな然り、重箱などには四隅にいだしたり、

〔貞丈雜記六飲食〕一十字と云は餅のこと也、東鑑に賜十字、又供十字、又食十字など、あるは、何も餅の異名也、昔晋朝に何曾と云人字は顯孝と云、此人親に孝行にて行儀正しき人なりしが、奢侈者にて衣服諸道具飲食、皆花麗を盡せり、蒸餅を食するに蒸餅の上に拆て、十字を作ざれば、食ざりしと也、此故事を以て、餅を十字と云也、拆て十字を作とは餅の上に小刀めを十字字に入て、くひよき様にした、めたるをいふ也、右何曾がことは晋書第十三卷めにみえたり、蒙求にもみえたり、

〔晋書三十三河會傳〕性奢豪、務在華侈、帷帳車服窮極綺麗、厨膳滋味過於王者、每燕見不食、太官所設、帝輒